

# 山びこ通信

山の学校 2018年度  
クラス便りとエッセイ  
LVDVS COLLINVS

クラス一覽 ページ ことば<sup>9, 11</sup> かず<sup>10</sup> しぜん<sup>3</sup> かいが<sup>24</sup> つくる<sup>22, 23</sup> れきし<sup>13</sup> 将棋<sup>8</sup>

西洋の児童文学を読む。西洋古典を読む。数学が生まれる物語を読む

数学<sup>10, 15</sup> 英語<sup>15, 16</sup> 漢文<sup>17</sup> 東洋古典を読む ユークリッド幾何

ギリシャ語<sup>21</sup> ラテン語<sup>20</sup> イタリア語<sup>17</sup> ロシア語<sup>19</sup> フランス語<sup>18</sup> ドイツ語<sup>19</sup>

山の学校ゼミ『社会 / 数学 / 調査研究 / 法律 / 生活と文化 / 倫理』 ウェブプログラミング

## AI時代と子どもたち

山の学校代表 山下 太郎

技術の進歩に伴い、「AI 時代」や「人生百年時代」といった言葉が耳目を集めるようになった。子どもたちは何か新しいことに挑戦し、新時代の競争に勝てるよう今から準備を開始すべきだろうか。様々な立場から様々なに答えることが可能であろう。私は幼児教育に軸足を置く者として、今の問いには「否」と答えたい。むしろ、今までなおざりにされがちであった教育の王道——「三つ子の魂」を百まで守る道——にあらためて注目する必要が出てきたのだと思う。

従来競争に根ざした教育に身を置く限り、子どもたちの「三つ子の魂」は十代のうちに輝きを失う恐れがある。中高生は試験のために勉強するが、勉強そのものを楽しみとは感じない。大学生は授業に出席するが関連する図書は読まず、積極的に質問をしない。彼らの学びは受験勉強や就職活動とともに終わるだろう。これに対して、勉強そのものを楽しむことのできる少数の者たちは、他者との競争に「勝つ」という動機づけがなくても、自らの興味を赴くままに知の領域を広げ、かつ、深め、生涯にわたり学びの魂を輝かせ続けるだろう。

両者の違いは大きい。昨今言われるように、AI 時代においては、前者の人材が職を失い、後者の人材に光が当たることは間違いない。OECD 諸国はその見通しのもと、また、様々な教育研究の成果のもと、教育の軸を「非認知能力」の育成にシフトし、その上で幼児教育に対する国家的支援を積極的に行っている。

一方、わが国の場合、国民の関心は入試の動向に一喜一憂し、幼児教育の中身については何も知らないに等しい。たとえば、「遊び」を通して子どもたちが何をどう学ぶのか、具体的に語れる人は少ない。「子どもを真ん中」に据えた家庭教育と集団教育のほどよいバランスとは何か、考える人はほとんどいない。日本の場合、就学前の教育の議論の多くは、子どもに寄り添った目線ではなく、大人の都合で語られるのが常である。一方、幼児教育の重要性についての私の考えは、昨年上梓した拙著『お山の幼稚園で育つ』（世界思想社）の中で書き綴ったので、これを機にぜひご一読いただきたい。

さて、ここでは、以上のような背景の上で、AI 時代に求められる子どもたちの学びについて「幼児教育的視点」から具体的な意見を述べてみたい。先にふれた「積極的な学び」と「消極的な学び」の違いは何に起因するのだろうか。その軌道修正はよほどなことがない限り、高校や大学では手遅れである。まさしく「三つ子の魂百まで」の言葉通り、この対比のルーツこそ、幼児期の育ちに関係するのである。

私は幼稚園の年長クラスで俳句を教えている。芭蕉や蕪村、一茶の俳句を季節に応じて紹介し、学年全員で声に出して唱える。いわゆる素読スタイルである。俳句の「五・七・五」のリズムに慣れてくると、子どもたちは易々と名句を暗誦し、やがて自分で俳句を作るようになる。私は「全員に俳句を暗記させよう、俳句を作らせよう」などという目標を掲げてやっているのではない。ただひたすら古典の名句を繰り返し朗唱する。それが基本で、その結果はおまけである。子どもたちも「遊び」の感覚で俳句を作ってくる。古典の言葉に親しむことが狙い

▶次ページへ

なので、作ってよし、作らなくてもよしである。成績評価を行うと、こうはいかない。「ここまで出来たらこの評価」という基準を設けないといけない。だが、俳句を作った子の評価は高くなり、作らない子の評価は低いとなれば、俳句作りが「遊び」でなく「義務」になる。「遊び」だから自主性、創造性、感性が育つとも言える。

これはほんの一例である。幼稚園では、日常生活のすべての場面が遊びであり学びの機会である。先生たちは、子どもたちの様々な発言はもちろんのこと、声にならない心の声も含め、一つ一つを丁寧に拾い上げ、個人の学び、全体の学びにつながるよう日々心を砕いている。先生にはなんでも話ができる、先生にはなんでも話を聞いてもらえる、という安心感がすべての前提であり、これがうまくいかないと、子どもたちは心を閉ざし、心の声を自由に発することを控えるだろう。

従来の小学校以上の学校教育においては、生徒たちをバスのダイヤのように決まった時間に決まった場所に運搬する必要があるため、子どもたちの自由闊達な声を拾い上げる時間的余裕は少なかったように思う（今後学習指導要領の改訂で変わる可能性はある）。作家の司馬遼太郎は中学の英語の時間に「ニュー・ヨークという地名にどんな意味がありますか」と質問し、先生に「地名に意味があるか！」と叱られた。「幼稚園的視点」に立てば、先生自身が「面白いことを聞かぬ」と目を輝かせ、「ヨーク」に「ニュー」がついた歴史的背景を喜々として説明したに違いない。

司馬氏はその後、英語の授業をボイコットし（試験はわざと白紙提出）、図書館にこもって独学する。図書館中の本を読みあさり、英語の力も独力で身につけた。その独学力を支えたのは司馬氏の旺盛な好奇心と読書力であったことは間違いない。逆に言えば、司馬氏は中学生にして圧倒的な読書力を誇っていたからこそ独学の見通しを立てることができたのだと言える。私が今好奇心と感性豊かな中学生の親なら、本を読む力をどこまでも高めてほしいと願うだろう。日本の学校教育は信頼に値するものであるが、万一子どもにとってボイコットしたい事態が起きてても、好奇心と読書力さえあれば、自分で学びの道を切り開くことが期待できるからである。

一方、競争としての学びの蔓延は、中高生の「本離れ」や「読書力の低下」を促して久しい。競争をあおるほど、教科書さえ正確に読めない生徒が量産されるようである。じっさい入試で正解をすばやく導くには「こうすればよい」、「ああすればよい」といったノウハウが一人歩きし、いわばパン食い競争のような態度で日本語を「噛まずに飲み込む」生徒たちが後を絶たない。腹を壊し、熟読・反復読みによって得られる読書の味わいを知らぬまま、大学に入るところには専門書を精読・多読する気力も失っている。では、日本語の読解力を確かなものにするにはどこから手をつければよいのか。

私が重視したいのが、音読の習慣である。どの科目の教科書でもよい。教科書を開き、そこに記された文章がスラスラ読めるかどうか、読解力に不安を抱える中・高生は一度試してほしい。読めない漢字があれば調べた上でもう一度最初から読み直す。読んでつまづくなら、スピードを落として再度読み直せばよい。うまくいかなければ、できるまで繰り返す。それでもだめなら、一つ下の学年の教科書で試してみる。一番駄目なのは、「できるふり、わかったふり」をすることである（英語に関して付言すると、平均的高校生は高校入試レベルの英文をスラスラ音読できない）。

そもそも、中学生になる段階で読解力の差がつく要因は何か、どうすれば小学校時代に読む力を高めることができるのか。技術的には今ふれた音読が重要である。とりわけ低学年の段階でこの習慣を身につけてもらいたい。大人は子どもが「本好き」だと思って油断してはいけない。我流の「飛ばし読み」や「斜め読み」に長けているだけかもしれない。音読の場合、そのような誤魔化しはきかない。親は、漢字の書き取りや計算ドリルと並んで子どもの音読を丁寧に見守ってほしい。一字一句を声に出して読む経験が精読の基礎になる。

音読が習慣になれば、子どもは自ずと教科書の内容を暗唱するだろう。だが、親はこれを目標にせず結果として受け止めるべきである。大事なことは、「継続は力なり」と信じて子どもの地道な学びの一步一步につきあうことである。

このような親子のつきあいは、相互の信頼がなければ成り立たない。その信頼関係をじっくりゆっくり育て



る上で、私は幼児期の絵本の読み聞かせの習慣がきわめて重要な意味を持つと考える（この意味で学力の基礎は幼児期の習慣にあると言える）。親は心を込めて丁寧に言葉を発する必要がある。その言葉が子どもの音読の手本になる。また、親自身が子どもと一緒に絵本の楽しさ、素晴らしさを味わっていただきたい。その気持ちは本を読む声の響きに表れる。楽しい場面、悲しい場面、それぞれの場面ごとに使い分けられる親の声色によって、子どもは文章を深く理解し、イメージを豊かに形成する。〈▶巻末へ続く〉

## 『しぜん』 A・B1・C1・C2・D 担当 梁川 健哲

担当をさせて頂いて以来、しぜんクラスはどんなクラスだろう、どうあるべきだろうと考え続けてきた10年間でした。しかし、いつも辿り着くのは、「答えは子どもたちの中にある」ということです。（「かいが」クラスも然りです。）

クラスに集まったみんなの関心、心持ち、体調。そこに、季節と天候、森での思いがけない発見や出来事が掛け合わさりながら、流れるようにクラスの時間が過ぎていきます。

今年度は強い台風が森の景色を一変させました。みんなはそうした変化を敏感に感じ取り、最初は少し不安なのか、あまり森の奥まで進みたがらない様子も一部見られました。私がいつもより少しピリッとした気持ちで森に入るよう事前に伝えたせいも多少あるでしょう。

しかし、程なく子ども達は、道を真横に塞ぐ倒木を軽々とくぐり、のりこえ、新しく生まれた空間を「旬の遊具」として楽しみ始めました。或いは台風が落としてくれた見慣れない木の葉や鳥の古巣に歓喜しました。立派な木

の枝は喜んで集められ、次々と「ひみつ基地」の材料、あるいは焚き木になっていきました。

大人になると、別の場所で起きたもっと甚大な被害のことを思い浮かべ、どこか遠慮する気持ちが働いたりします。勿論、そうした広い視野や想像力も大切です。

しかし、子ども達の軽々とした足取り、あるがままの状況を前向きに受け入れ楽しんでいるそうした姿を目にしていると、何か、心の中にぼつりと「希望」という二文字が浮かんでくるような、そんな明るい気持ちにさせられることに気づきます。子ども達の本性をまざまざと見せられているようでもあります。

今年度から新たにDクラスが増え、全部で5クラスになった「しぜん」クラス。「体で感じられる情報」が無限に詰まった森で、「今しかない今」を堪能する子ども達の様子をダイジェストでお伝えします。尚、詳しいクラスの様子はホームページ内「ウェブログ」にも掲載しておりますので、どうぞご覧下さい。

### 【Aクラス】

ある一月のクラス。先陣を切って森の奥の谷を下っていった高学年の二人が興奮気味に叫んでいます。スニーカーがずぶつと埋まるくらいのぬかるみに嵌ったのです。手を貸そうと近づいた私もずぶつといきました。そのうち、真っ先にAちゃんが靴も靴下も脱ぎ、ズボンをまくり上げて裸足になり、それを見た3年のHちゃんMちゃんも続きます。

「先生もやんなあかんでー！」と笑うAちゃん。「この状況は勿論想定外、準備もしていない、私までやりだしたら收拾がつかなくなるか・・・」という脳内CPUがはち切れそうになる10秒の葛藤後、「何とかなる・・・！」えいやっ、と私も参戦しました。泥んこのスニーカーに首を項垂れているK君を微笑ましく横目で見ながら、膝下まで足を入れると、「ぬるっ、ざらっ、ひんやり・・・」が一斉に押し寄せてくる感覚。これはやった人にしか分からない心地よさでしょう。「それにしても、季節を間違えたね！」などと笑いながら、荷物にあった軍手とウェット







ティッシュで何とかみんなで泥を拭い、ずくずくのスニーカーで暗くなった森を引き返しました。

思い返せば、春には全員で裸足になって沢を上った時がありました。「沢の中しか歩いちゃダメってことね！」というルールをその場で決めたのも生徒さんです。

森の「いつもの場所」で、鬼ごっこをしたり、隣り山まで出かけていって自作ルールの大運動会をしたり、ここ数年、一番運動量の多かったクラスかもしれません。そうした中に、みんなで夕焼けを眺めたり、鳥の声に耳を澄ませたり、数々の静寂の瞬間が彩りを添えています。

高学年へ向かうに従い、自然科学の知識への興味が高まっていきます。そうした題材を私なりに用意しながら、とうとうその出番が来ないまま一年が終わりそうです（それに高学年の二人は、自主的に読書や創作の時間を持っています）。「一秒でも多く、森の空気を吸いたい、走りたい…」というみんなの溢れる気持ちを「解放」する一年でした。

クラスを引っ張り続けてくれた高学年 2 名の話が中心となりましたが、仲間たちは大変よい影響を受けたと思っています。これからのクラスもどうぞ見守っていて欲しいと思います。

## 【Bクラス】

このクラスにも、今年で「しぜん」クラス卒業となった高学年の S ちゃん、T 君がいます。独特の穏やかさを持つこの二人、そして同じく卒業となった 3 年 N 君が、活発にして和やかな雰囲気を織りなし、クラスを牽引してくれました。

春には「アリジゴク」の巣に落ちた蟻が命からがら脱出の様子を、息を吞んで見守ったり、今度はアリジゴクの姿を見たくて仕方なくなり、そっとすくって、砂の中に隠れていたアリジゴクの姿や行動を観察したりしました。

このクラスの「基地」は、『ひみつ』でなくてもよいから家みたいなものを作りたい」と言って、早春から作り始めた、まだ新しいものです。

ある木漏れ日の穏やかな日には、木の枝をからませた壁で丸く囲まれた基地の「床」に寝そべて「気持ちいい…」と空を見上げる一時がありました。

その後も、みんなで協力して、隙間だらけの壁を、葉っぱつきの枝で覆ったりして、随分と雰囲気が出始めていたのですが、夏休み明けに訪れてみると、台風で無残に壁が崩れ落ちて、内部空間が塞がっていました。





「ああ、もうだめだ」「修復不能～！」と、その次に出た言葉は、「新しい場所、また探そう～！」でした。思わず脱力して笑ってしまいましたが、何とも言えない軽妙な前向きさをこのクラスらしくていいなあと感じました。程なく、倒木がシンボリックないい場所が見つかり、「ここにしよう！」と言ってその日のクラスが終わりました。

結局、次なる基地づくりの着手を待たず、秋いっぱい卒業を迎えた3名ですが、きっとそのプロセス自体を楽しんでくれたのだと思います。

このクラスも、たくさん走ったり、また、焚き火を囲んだりしました。焚き火で焼いた、ジャガイモや焼きりんご。「なんでこんなに美味しいん？みんなで焼くからかな？」「今まで食べたジャガイモの中で一番美味しい！」ちょっと目に染みる煙の香り、あたたかさとともに、胸の引き出しにずっと保管されますように…。

冬学期からは、Fちゃんと、新入生H君の二人と、小鳥の囀りに耳を澄ませたりしながら、一段と静かで穏やかな時間が流れています。どうぞ次の展開もお楽しみに！



## 【C1 クラス】

この1年を振り返ると、C1クラスでも「基地づくり」が大きなイベントでした。今までに通ったことのない脇道を進むと、緩やかな谷があり、そこには大きな倒木が別の木に支えられて出来た三角形の空間を発見しました。斜辺となるこの倒木が屋根を支える梁となります。一目見て「ここだ！」とみんなが一瞬で合意しました。

昨年度までの「基地」は、どちらかと言えば私がそれとなく誘導した場所でもあり、頻繁に出かけるには少し遠い場所でした。今ではこの新しい基地のことでみんな頭がいっぱいです。

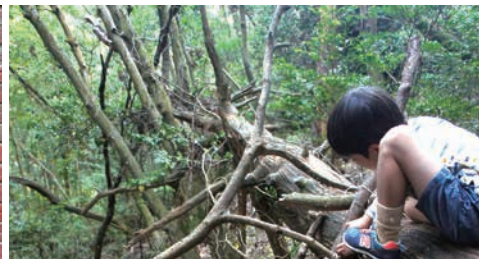
あるとき、朽ち木の剥がれた樹皮が屋根の「瓦」に使えることに気がつき、S君を中心に、手分けして樹皮

を探したり、編んだ木の枝に乗せたりする作業が流行りました。高い場所がめっぽう得意なT君が、倒木の「梁」に上って立て掛けた柱をロープで縛る役です。

またあるときは、そんなT君のようにみんなで「梁」に腰掛けたくなり、「こうやって手をかけて、足をかけて…」というT君の指導と私のサポートのもと、みんなで腰をかけました。「やっほー！」と静かな谷に、何度もみんなの声がこだましました。

加速度的に、基地作りは今も進行しています。「いつ頃完成するかな・・・」という私の質問に、「まだまだかかると思う・・・」とT君が微笑みました。

基地に夢中になる以前、春から夏にかけては蝶やバッタなどの虫探しや、水辺の生物探しに夢中になりました。



▲ 以前の基地

現在の基地 ▶





その合間に木登りもよくしました。

女の子が、それまでは苦手と思っていたカエルを初めて手に乗せて「可愛い」と思うようになったことや、オタマジャクシにも興味を持ち、家での飼育を試みたことも収穫だったと思います。生き物好きの仲間たちの影響も、少なからずあるのでしょう。

## 【C2 クラス】

このクラスの「ひみつ基地」は、今の4年生が1年生のとき、当時の担当である Ryo 先生と一緒に作ったものが受け継がれ、改修と発展を続けて現在にまで至ります。

夏休み前に、「屋根づくり」と称し、片流れの屋根部分の枝を密に、頑丈にする補修作業をしました。秋になり、暫く経ったある日に行ってみると、あの猛烈な台風で周辺の木があちこち倒れているにも関わらず、ほぼそのままの形を留めていたことに感激しました。すぐ脇では杉の木の先端が、斜めにだらりと青々とした葉の束を垂れ下げ、ものすごい存在感です。普段は手の届かないこの、杉の木の天辺に近い葉を分けてもらい、焚き火でお茶を沸かしました。「杉の葉茶」です。ハーブのようにスースーする味なのですが、みんな「美味しい!」と言って飲んでいました。

度々 C2 クラスの記事に登場する「蟹の家」という遊びがあります。沢の中の特定の場所に石を積んだり穴を掘ったりして沢蟹が遊んだり、住処にしてくれそうな場をつくるのですが、お祭りの通り、時間が経てば、沢の流れの中に姿を消していきます。しかしまた懲りずに飽きることも無く、崩れては再構築する、を繰り返して、もう数年が経ちます。みんなはこのとき、「沢蟹」になっているみたいです。

或いは雨量の少ない季節であれば、数週間から数ヶ月、ほぼそのまま形を留めていることもあるので、それが嬉しいのですね。「次回まで残ってるかな」と思いながら一生懸命に沢の流れに対抗して作るのです。沢との対話でもありますし、どこか「ひみつ基地」に通ずるところも感じます。

1月のある日、いつもの山道を歩きながら「筍生えてくるの、いつ頃だっけ」「また掘りたいなあ」などという会話が早くもなされていて、思わず笑ってしまいました。繰り返される、季節の喜び。その幾つかが、彼らの心の中に、反芻される思い出として住みついてくれたのなら、それほど喜ばしいことはありません。

## 【D クラス】

2018 年度から初めて山の学校に来てくれた 1, 2 年生男子が集まるクラスです。春から秋にかけては虫探しをしたり、きれいな落ち葉を見つけては拾い集めたりしました。

虫が大好きなみんなのために、『ダンゴムシに心はあるのか』（森山徹著 / PHP サイエンス・ワールド新書）を元に、ダンゴムシに協力を得た実験をみんなでしてみました。簡単に言えば、ダンゴムシが想定外の特殊な事態に直面し、いかに考え行動しているか（そこに表出するものを心と定義できるのではないかと）、といった内容です。

「障害物を回避しても、また障害物が表れる」状況を再現した「T 字路が繰り返される迷路」をどう進むか、水の掘りで囲まれた円形ステージの上でどう行動するか、といった実験を大まかに真似ました。特に、後者につい





ては雨上がりの園庭の水たまりで行いましたが、「掘り」の少し浅そうな所を見つけて意を決したように泳ぎ出す姿や、一カ所だけ木の枝の橋を渡すと、すぐにそれを察知して渡る様子をドキドキしながらみんなで観察できました！派生して「ヤスデの場合は迷路をどう歩くだろう」「水たまりに落ちたアリは泳いで岸まで行けるだろうか？」など、次々と子ども達から興味が沸いてきました。

さて、このクラスでも後半から「基地づくり」が始まりました。例によって、台風で出来た新しい空間を気に入っていました。力のある男の子たちですから、必要もあるかと、ある日にノコギリを導入しました。しかし、「初めて」というのはとにかく使ってみてみたい気持ちが勝るので、斜めに倒れかけているからといってその木にむやみに刃を当ててみたり、邪魔だからこれ切る、と安易に言ってみたり、その心得に不十分さを感じたため、一旦使用を封印し、山野忠彦さんという「樹医」による「木の祟り」というちょっと恐いお話を伝えました。山野さんは、「木にはその人がただ自分を傷つけようとするだけの人か、大事にしてくれる人なのかちゃんと分かる」と言います。

また、基地作りに際して、「ここは僕の部屋、入っちゃダメ」なんていう場面もありました。基地づくりは楽しいだけではなく、仲間への思いやりや、自然への敬愛の心を育むことのできる好機でもあるので、引き続き注意深く見守っていきこう…。そう思っていた最中、基地にしている場所をある日訪れると、おそらく別の（もっと年上と見られる）子どもたちが遊び、手を加えた形跡が見られました。ここは、動物たちが暮らし、色々な人も足を踏み入れるという意味で「みんなの山」なのですから、そのことは受け入れなければなりません。みんなはそのことをすぐに理解し、程なく「次の場所探し」が始まりました。「考えてみたら」前の場所は見つかり易すぎたね 落胆よりも、もう次のワクワクに移行しています。

だからこそ今度は『僕たち』以外には見つかりたくないね！』という思いで、みんなの絆が深まっていくことを期待しています。



### ● 補遺「ひみつ基地」の意味

森の中で自然発生的に続いてきた「遊び」のひとつとして、「ひみつ基地」づくりがあります。

それは子どもたちを見る限り、生き生きとした活動として自然に行われるのですから、それ以上に説明を加えるのは無粋な気がします。しかし「それが一体何になるのか」と、敢えて言葉を添えてみますと、実に多義的で総合的な学びを内包していると感じますし、「それが一体どこから来るのか」と言えば、動物的な巣作り本能からくるものかもしれませんし、自立心の萌芽、或いは心の安全基地のような役割をするものであるかも分かりません。具体的には、各クラスの事例をご覧になり、それぞれ様々な意味があることを感じて頂ければと思います。

また、「あまり勝手にあちらこちらに基地が増えすぎてもいけないな」なんて思うこともあるのですが、不思議とクラス同士で場所が重なることがなく、何年も前に作ったものは風化してまた森に溶け込んでいくので、一定数以上増えることはありません。

悠久の循環の中に、つかの間姿を留めては消えていく鳥の巣のように。もし、森の中で「ひみつ基地」らしきものを見かけられた際には、どうぞ温かい目で、そっと「気づかなかったふり」をして頂けましたら幸いです。



現在 6 名で、毎回 1 人 3 対局を目安にやっております。最初の 1 局は生徒同士で行い、2・3 局目は私が駒落ちの二面指しを行っています。

大人との対局は気合が入るようで、いつもより集中して指してくれて凡ミスはなくなります。普段集中が切れたときに駒をタダで取られてしまう子も、読みを入れ、慎重に指してくれます。

ただ、将棋では慎重に指しすぎるのも考え物で、こちら側に受け手がなくなり、仕方なしに攻撃している手をすべて受けようとして逆転されてしまう場面もよくみられます。将棋は持ち駒がある程度あれば攻めは続くもので、全部対応しようとするとかえって攻め込まれる場合も多いのです。そういうときにものをいうのは冷静な判断力で、「この手を放置したら飛車が取られるけど、こちらが攻めたらもうすぐ詰むぞ」と考えることができれば、こちらのハッターを無視して攻め、勝利することができるようになるはずで、「先生が指した手だ」とか「相手が攻めてきた」ではなく「この手は次に両取りを狙っている」といったように余計な情報を排除して考えることが肝心になるわけです。そのためには将棋の論理的な考え方をトレーニングする必要がありますので、今後の教室で重要視していこうと思います。

さて、将棋界では杉本昌隆七段と藤井聡太七段の順位戦師弟同時昇級が実現するのではないかと話題になっています。藤井七段の昇級は開幕前から当然有力視されていましたが、杉本七段は、(失礼ながら)全盛期を過ぎた棋士という印象で、50 歳という年齢からみても昇級候補に全く挙がっていませんでした。しかし蓋を開けてみれば最終戦を残し 8 勝 1 敗で堂々の二位につけています。二位までが昇級ですので、最終戦に勝てば自力昇級なのですが、果たしてどうなるのでしょうか。

杉本七段活躍の大きな要因が藤井七段という弟子の存在にあることは間違いのないでしょう。将棋は頭脳競技であり、日頃の研究やトレーニングが重要になってきますが、それを続けるためにはモチベーションを維持することが必要になってきます。教室でも、生徒同士がライバルとして切磋琢磨できるような環境づくりができればと思います。





# 『西洋の児童文学を読む』

担当 福西 亮馬

『王への手紙(上)(下)』(トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫)を読しました。2017年4月から2018年11月まで、約一年半の間、一回一章ずつのペースで進みました。受講生のみなさん、おめでとうございます。

現在は続編の『白い盾の少年騎士(上)(下)』(トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫)を読み進めています。増えていく既読箇所を財産に、ますますアンテナを張っていこうと思います。



音読と、予習したこと(要約、語彙、共感、発見)を互いに報告することが、クラスの中身となります。講読のよいところは、複眼的に読めることと、斜め読みを封じることです。たとえば、類似表現を拾うことは一人では完全にしにくいものです。仮に、対になる二人の登場人物が、別々の章で同じ台詞を言っている、あるいは単語を一つだけ変えて言っている、といった場合、ほぼ間違いなくそこに作者の意図が伺えます。ですが、気付かないことには始まりません。計算と違って、文章というものは、解析に時間がかかればかかるほど、記憶に定着します。全体で引っかかる情報が増えていけば、作品の構造がよりはっきりしてきます。

最近では、予習の新しいメニューとして、それぞれ「質問」を考えてきてもらっています。一見当たり前に思うことでも、質問してみると、意外と別の人にとっては当たり前でないことがあります。それなので、あえて発言することが勉強になります。同じ意見であれば確認になりますし、違う意見であれば発見の糸口になります。

さて、来年度からはこのクラスの参加者はみな中学生に持ち上がります。時間帯は18:40～20:00です。引き続き『白い盾の少年騎士』の読了を目指します。

一方、小学5～6年生にも、新規に1クラスを開きます(時間帯は未定)。こちらでは『はてしない物語』(エンデ、上田真而子訳、岩波書店)を読みます。どちらのクラスにも、新たな参加者をお待ちしています。



## 『ことば』2～3年

### 山の学校ゼミ『調査研究』『倫理』

担当 浅野 直樹

アウトプットを意識することでインプットの質が高まると言えます。

「調査研究」クラスと「倫理」クラスがまさにその関係にあります。興味のあるテーマについて自分の考えをまとめるというアウトプットの作業を続けていると、使えそうな考えはないかと常にアンテナを張っている状態になります。身の回りの人との会話やテレビの内容から着想が得られることもあります。が、「倫理」クラスで扱うような過去の偉大な思想の射程は思いの外広く、そこで着想が得られることがしばしばあります。

「調査研究」クラスでは、ライトノベルについて一元と多元を軸にして考察を展開してきました。「倫理」クラスで取り扱う、プラトンとプロタゴラス、デカルトに代表される大陸合理論とロックに代表されるイギリス経験論、カント的な近代思想とリオターナルなどの現代思想も、一元と多元の綱引きだと解釈することができます。

ことばクラスのえほん作りでも同じことが言えます。そもそも、えほんのもととなる原稿を書くことができたのは、それまでにたくさんのえほんを読んできたというインプットのおかげでしょう。そして実際にえほん作りを始めると、美しくてわかりやすい表現を求めて、時には議論をしたり、国語辞典を引いたりもしました。





9 右の図のような2辺の長さが1cmと2cmの長方形のシールがたくさんあり、これらのシールを $AB=2\text{cm}$ ,  $BC=n\text{cm}$ の台紙ABCDの全面に、重ならず、すきまができないようにはっつけていく。そのとき、シールが台紙からはみ出さないようにする。

例えば、 $n=1, 2, 3$ のとき、台紙ABCDとシールの異なるはり方は次の表ようになる。



$n=1$ のとき		$n=2$ のとき	
台紙	シールのはり方	台紙	シールのはり方
$n=3$ のとき			
台紙	シールのはり方		

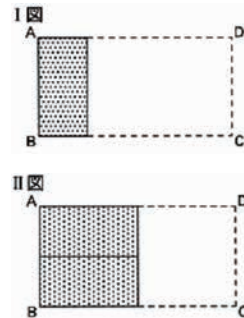
このとき、次の問(1)・(2)に答えよ。

(1) 次の空欄  ,  ,  に当てはまる数をそれぞれ答えよ。

.....答の番号【19】

$n=4$ のときのシールのはり方は  通りある。

その  通りのなかで、台紙の左端(辺AB側)が、I図のようになっているはり方は  通りあり、II図のようになっているはり方は  通りある。



(2)  $n=6$ のときのシールのはり方は何通りあるか。

.....答の番号【20】

これは平成15年度の京都府公立高校入試問題です。問題の意味は小学生にも理解できる一方、高校数学の漸化式を用いた問題であるとも言えます。

でたために数え上げても注意深さと根性さえあれば正解にたどり着けるかもしれませんが。しかしそれだと答えに確信が持てません。

それでは論理的に答えを導きます。

(1) がよい誘導になっています。 $n=4$ のとき、I図の点線内のはり方は $n=3$ のときの3通り、II図の点線内のはり方は $n=2$ のときの2通りで、合計5通りになります。同じように考えると、 $n=5$ のときは、 $n=4$



のときの5通りと  $n = 3$  のときの3通りを足した8通り、 $n = 6$  のときは、 $n = 5$  のときの8通りと  $n = 4$  のときの5通りを足した13通りです。(1)のアは5、イは3、ウは2、(2)は13が正解です。

これは、シールのはり方の総数を  $a_n$  とすると、 $a_1 = 1, a_2 = 2, n \geq 3$  のとき  $a_n = a_{n-1} + a_{n-2}$  という漸化式を満たす数列、フィボナッチ数列です。 $n$  を順番に当てはめることは簡単ですが、一般項を求めるのは無理数が登場するのでかなり骨が折れます(興味のある方は「フィボナッチ数列 一般項」といったワードで検索してください)。

その代わりに、一般項に無理数が登場しない類題である東京大学1995年理科の問題を紹介しておきます。解答は検索すればいろいろ出てくるとおもいます。

二辺の長さが1と2の長方形と一辺の長さが2の正方形の2種類のタイルがある。縦2、横  $n$  の長方形の部屋をこれらのタイルで過不足なく敷きつめることを考える。そのような並べ方の総数を  $A_n$  で表す。ただし  $n$  は正の整数である。たとえば  $A_1 = 1, A_2 = 3, A_3 = 5$  である。このとき以下の問いに答えよ。

(1)  $n \geq 3$  のとき、 $A_n$  を  $A_{n-1}, A_{n-2}$  を用いて表せ。

(2)  $A_n$  を  $n$  で表せ。

小学生クラスから高校生クラスまで、確信が持てるように論理的に思考するというのを大切にしています。

## 『ことば』1年・3~4年・5~6年

担当 福西 亮馬

1年生のクラスでは、俳句をしばしば取り上げました。「かくれんぼ三つかぞえて冬となる」——これは寺山修司の句です。ひと目「あれ?」と思われたかもしれません。俳句とはもっと古めかしいものではないのかと。一方、「去年今年(こぞことし)貫く棒の如きもの」——これは高浜虚子の句です。仮に受講生が意味を取れなくても、声に出すうちに、張り詰めた空気を覚えます。それは句の格調によります。

古典作品とは単に古いもののことではありません。読者に愛されることで一番になっていくもののことであり、その結果古くなるのです。そのような俳句を、受講生たちと同じ時代を生きる一読者として、親しみを込めながら紹介していこうと思います。

また絵本では、読み聞かせから受講生による音読に比重を置きました。最近では、『あらしのよるに』(木村裕一/文、あべ弘士/絵、講談社)シリーズを毎週1冊ずつ読んでいます。6冊あるうちの4冊までできました。シリーズまるごと読破を目指します。



3~4年クラスでは、俳句、壁新聞作り、百人一首(かるた)をしました。

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と詠めば、安倍仲磨の望郷の思いに触れます。「春すぎて夏来にけらし白妙の衣はすてふ天の香具山」と歌えば、持統天皇の爽やかな季節感をともにします。そして、「村雨の露もまだひぬ榎の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ」と口ずさめば、寂蓮と一緒に光に目を細めるような気持ちになります。

うれしいことに、時々、受講生から「俳句だけじゃなくて、短歌も作っていい?」と聞かれることがあります。願ってもないことです。音楽同様、短歌もまた心を弾く表現形式です。ピアノをする知人から、「うれしい時、悲しい時、そして静かになりたい時。私には今の気持ちを表せるレパートリーが最低三つあればいい」と聞いたことがあります。今後、忙しい世の中が反省されてくると、その価値はますます見直されるだろうと思います。

5~6年クラスでは、『西遊記』(渡辺仙州/翻案、偕成社)を読んでいます。全3巻の上巻が終わります。読





み終えた章ごとに要約を書いています。それは「あの時こういう気持ちで読んでいた」という付箋になります。

ところで、科学者の中谷宇吉郎は、『西遊記』が少年時代の愛読書だったそうです。『簪を挿した蛇』というエッセイには、科学の紙芝居案に『西遊記』を推したと書いています。というのも、「余り早くから海坊主や河童を退治してしまうことは、本当の意味での科学教育を阻害するのではないか」と心配したからでした。中谷宇吉郎を教えた寺田寅彦にも同じ音色を感じます。そのエッセイ『ルクレチウスと科学』では、「ルクレチウスの書によってわれわれの学ぶべきものは、その中の具体的事象の知識でもなくまたその論理でもなく、ただその中に貫流する科学的精神である」と書いています。ルクレチウスは二千年前に『物の本性について』を書いたローマ人です。寺田寅彦は、科学の最先端とは関係のなさそうな古典をワクワクしながら読む体験が、科学者の想像力の翼を涵養するだろうことを示唆しています。

釈迦の手のひらを舐斗雲（きんとうん）が飛び回るなんて、本当にはありえないことです。しかしそれでも私たちは不思議とふしぎがりません。なぜでしょうか。その間には一生答が出ないかもしれません。けれども、よりよい方へと私たちを導いてくれるような気がします。その願いが『西遊記』をテキストに選んだ理由です。

## 『かず』 3～4年 A・5～6年 担当 福西 亮馬

3～4年生クラスでは、概数、分数、小数、図形、棒グラフを復習しました。また、文章題に使う線図を練習しました。学校の内容に一見心配がない時も、復習することを面倒くさがない姿勢を応援したいと思います。

5～6年生クラスでは、学校で最近習ったところに自信を持つことと、6年間の要点チェックをしています。積み残しなく中学に上ってもらうことが目的です。最近では、割合、度数分布、文字式、比例、速度をおさらいしました。「 $x$  がいくらなら  $y$  はいくらか」とその逆を考える時、割り算になるか、かけ算になるかを吟味する癖をぜひつけてください。また、1より小さな数で割ると答が大きくなるという感覚は、この先ずっと活躍します。

以上の学校の補いのほかには、パズルをしています。

小学校の算数は、反射的にでも手を動した分だけ上達します。反対に頭の中でむやみに走らされた（誤答を連発する）時間だけ嫌いになりやすいです。人前で自分を心細くさせる算数は、不案内な街並みに似ています。迷ったら自分のやり方（思い込み）に拘泥せずに地図を見る、つまり解き方から学ぶ方が、次のステップに進みやすいです。

パズルはどうでしょうか。最初から迷う前提で挑戦するので、頭の中で走り回るほど達成感が増します。反対に手を動かすほどうんざりしてしまいます。手続きが機械的ならパズルにする意味などなく、隠れた必然性を見つけるから醍醐味があるのです。

中学高校へと進むと、算数が数学になります。数学では、証明問題のような純粹思考的なもの、また抽象的な概念の比重が大きくなります。最初からそれを新しいパズルが始まると思って迎えられる人にはいいのですが、苦手な人には「いったいこれが何になるの」という不満が生じます。

算数の学び方の延長で数学に対してうまくいかないのは、短距離走のペースで長距離走をしてバテると似ています。黒板の解き方をノートにそっくり書き写した程度では、理解できることはまずありません。自分で一からパズルのように解き直さないといけません。そうなのです。中学高校では、先生の説明がもうすでにパズルなのです。「数学は、個別具体的から離れて抽象的になればなるほど応用範囲が広がる」と言われて、そのメリットに感動できる（パズルが解けたように思える）まで、脳をアンロック状態にしておかないと、結局はついていくのが難しくなります。

そうはならないように、クラスでは、頭の中で楽しんで走ることと、地道に手を動かすことと、両方が大事だ

と考えています。脳がロックしてしまって「勉強の意味」を問い始める前に、「まずはやってみよう」と思えるような、意識の種まきを心がけています。

## 『かず』 3～4年 B

担当 浅野望

このクラスでは、前半の30分は学校で習うような基礎的なことの復習にあてて、後半の30分で少し頭を使う問題を解いてもらっています。皆さんのたのしみはやはり後半にあるようで、毎週教室に来るとすぐに、「今日の問題なに？」と笑顔で聞いてきます。なかでも私がいちばん印象に残っている出来事は、初回授業で「1から100まですべて足すといくつになりますか。」という問題を出したところ、各受講生が異なるアプローチをして(ひたすら足し算をがんばるUくん、少しずつ計算をしてその結果を吟味するNくん、頭でじっくりと考えるAくん)、行き詰まったら全員で意見をぶつけ合っていたことです。他にも、折り紙を用いて、実際に手を動かしながら図形の面積について考えたり、方眼紙を用いてサイコロを作ったりしました。受講生には基本、自分のペースで解いてもらい、わからなかったら質問するようにしてもらっています。



もちろん、今までのクラスすべてが初回授業のようにドラマチックな展開だったわけではありません。30分間じっくり考えてもほとんど手が進まなかった回もありましたし、なかなか解けずにみんなの集中力が途切れてしまう回もありました。しかし、このような「もがき」にこそ、学びの本質があるのではないのでしょうか。わき目もふらずに、目的地まで一直線に進むことが理想とされがちな世の中ではありますが、受講生の皆さんにはぜひとも寄り道や回り道をしてほしいですし、そのような学びの機会をこれからも提供できればと思います。

## 小学生『れきし』

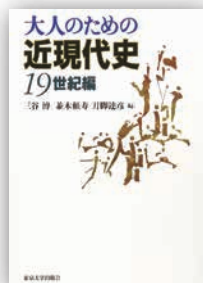
担当 吉川弘晃

このクラスは主に小学生高学年から中学生を対象とし、日本の歴史を扱っています。とはいえ、教科書に出てくる人名や出来事の名前を覚えてお終いではありません。このクラスは、書物と向き合って「自分の眼で事実を確かめ、自分の頭でそれらを組み合わせる」楽しさを味わえるようになることを目的にしています。

そもそも、このクラスは、2016年春学期、歴史を愛する生徒さんたちの強い希望によって誕生しました。彼ら、彼女らは小学生とはいえ、既に一通りの学校教科書の知識を備えていました。開口一番、私は「なぜ、桶狭間の戦いといった過去の事件を私たちは知っているのか」と皆に問うたように記憶しています。当時の人々の働きをめいめいの立場から記した数々の歴史書、これこそが遠く離れた過去と現在を繋ぐ糸。そこには正しいことも書いてあれば、嘘や誤りも含まれています。そうした糸を一本一本、手繰り寄せることで、過去の事実を(時には本だけでなく遺物や伝承をも頼りつつ)99パーセントに到るまで確かなものにしていく。その積み重ねが私たちの手元にある教科書の記述を作っているのです。

私がここで言いたかったのは、本に書かれた情報でも疑ってみて、それは何に由来するものか考えてほしいということでした。勿論、博物館の蔵から逐一、巻物を取り出して自分で読むのは現実上、難しいでしょう。けれども、そうした考え方に慣れると、過去の事実をいろんな面から見てやろうという姿勢が生まれます。すると、同じ出来事でも様々な？が頭に浮かんでくるでしょう。「戦いはいつ、どこで生じたか?」「なぜ織田方は勝利したのか?」「この事件は誰にとって、どのように重要なのか?」…。誰もがうなずく答えよりも、自分だけの問いを作る。これこそが歴史を学ぶ楽しさではないでしょうか。そんな思いを込めて、このクラスでは、生徒さんの疑問を大事にしています。

江戸時代末期から明治時代初期にかけての時代を扱う今学期は、三谷博・並木頼寿・月





脚達彦編『大人のための近現代史 19 世紀編』（東京大学出版会、2009 年）を教科書にしています。授業では本書を音読した後、一つ一つの事項をみんなで確認し（難しい箇所は講師が解説）、さらに問題を作って教室全体で議論を行っています。本書の難しさでもあり面白さでもあるのは、日本史を内側と外側の両方から考える方法を取っている点です。朝鮮・清・琉球・オランダなどで構成されていた東アジアの国際社会には、19 世紀になるとイギリスやフランス、ロシア、そして合衆国が参入します。東アジアとヨーロッパ、国と国の付き合い方が大きく異なる二つの世界が会合うことで、日本はどのように変わったのか（もしくは変わらなかったのか）。ここでの学びが普段、当たり前前に考えている「日本」や「アジア」を改めて、歴史的観点から考え直すきっかけになればと思います。

## 『西洋古典を読む』

担当 福西 亮馬

高官や名声を高めている人を羨んではいけない。彼らは自己の時間をたった一年のために空費する。これを目指した者の中には運命に見放された者もいるし、愚かさや気づき嘆いた者もいる。他人からの見返りのために努力し倒れてしまった者はきわめて見苦しい。

多忙のなかで死ぬのがどれだけいいだろうか。人は老年になりかけ者にされることを嘆く。人が暇を得るのは法から得るよりも難しいのである。誰一人として死を見つめないが、人生を終えた後の段取りを決めている。この人々は、葬式を豪華にしようとしているが、このような人の葬式は松明と蝋燭をともしで行われるべきである。

これは『人生の短さについて』（セネカ、茂手木元蔵訳、岩波文庫）、第 20 章に対する受講生の I さんの要約です。I さんは中学 1 年生です。

2018 年 6 月から 12 月までの約半年間、1 回 1 章ずつのペースで進み、『人生の短さについて』（同上）を読みました。I さん、おめでとうございます。

その 9 章 1 節に、「直ちに生きねばならぬ」（Protinus vive）という言葉があります。以下はそれをもとにしたフィクションです。

X さんはテレビをつけた。世の中は〇〇ブームである。それで X さんは〇〇を始めた。なるほど興味深く、すぐのめり込んだ。けれどもある程度すると上達しなくなった。X さんはつまらなくなり〇〇をやめてしまった。次に、X さんは友人 P さんのブログを見た。△△のことが好きで、いつもそれを記事にしている P さん。X さんの対抗心に火がついた。かつて中学の頃、自分が□□に夢中だった（それを受験勉強で中断していた）ことが思い出された。再び必要な物を買直し、□□を始めた。これなら人にも自分にも誇れそうだ。けれども急に仕事が忙しくなってきた。X さんはいつの間にか□□のことを忘れた。それから何年かのち、押入に□□の物を目にした。言い知れぬ虚脱感に襲われた。ふと電話が鳴った。Q さんからだった。Q さんは悩みを聞いてくれた。そして、▽▽をしてみてくださいはどうかと勧められた……。

この X とは、半分は私自身のことです。そのようなたらい回しを、セネカは 17 章 5 節で「惨めな生活の終りが求められるのではなく、始めが変わるだけ」（茂手木訳）と書いています。a から抜け出すために b、b から抜け出すために c という「多忙」（occupatio）が人生を短くするのだと。そうではなくて、{a,b,c} 集合そのものの出口を求めなければならないのだと。

セネカの使う「多忙」の反対語は、「暇」（otium）です。受講生の I さんは「暇」に「吟味」という解釈を与えました。自分のしたいことに「本当か？ 傲慢か？」と反省できるだけの精神的な余裕のことであると。また他者の忠告に「サンキューか？ ノーサンキューか？」とチェックできるだけのそれであると。

ところで、「人生」「暇」というキーワードから思い出される映画があります。「わしは人を憎んでなんかいられない。わしには、そんな暇はない」——これは映画『生きる』(黒澤明監督 1952年)の台詞です。最近またそれを見返しました。そして『人生の短さについて』そっくりだと感じましたので、以下に紹介します。

「つまり、君はどうしてそんなに活気があるのか。全くその、活気がある。それがこのわしには羨ましい。わしは死ぬまでその、一日でもよい、そんなふう生きて、生きて死にたい。それでなければ、とても死ねない。つまりおふくろ、わしは、何かほら、何かすることがある。何かをしたい。ところが、ところがそれがわからない。ただ、君はそれを知っている。いや知らんかもしれんが、現に君は……教えてくれ。どうしたら、君のように」

主人公は、長年無欠勤で役所に務める勘治という男。彼は自分が癌だと知り、あたかも、池でおぼれかけた子供(劇中で勘治はそれを回想しています)のように、生きがいをという助けを求めます。その時、わらをも掴む思いで追い回した女性への問いが、上の引用です。

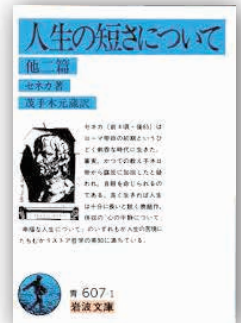
けれども女性は「ただ、働いて食べて……それだけよ」と答えます。彼女はおもちゃ作りを手がけています。「こんなものでも、作っていると楽しいわよ。これを作り始めてから、私、日本中の赤ん坊と仲良しになった気がするの」と言う彼女。もっと耳新しい理由を期待していた勘治は、絶望の淵に立たされます。「役所で一体、何が」と。まさにその時、90度の方向転換が生じます。人に言われてではなく、自分で気付いたのです。「やる気になれば」と。彼は立ち上がります。

勘治は、他人事で済ませた「どぶを埋めて公園を作してほしい」という住民の要望書を、書類の山から引っ張り出します。呆れられ、無視され、脅かされても、反応せずに仕事をします。眼中にあるのは一つの事。それを成し遂げる姿は、見る者の胸を打ちます。

勘治がつぶやく「そんな暇はない」の暇とは、死を忘れた時間の受動的な内容(a,b,c)、多忙そのものです。セネカなら「そんな多忙の時間はない」と言い直すでしょうか。一方、勘治のとった行動とは、セネカの述べる暇そのものです。それは時間軸から縦に生きることであり、「今」において立ち上がること、それが「直ちに生きる」ということなのだ、私は解します。

現在、クラスでは次のテキストを、ウェルギリウスの『アエネーイス』を読んでいます。英雄叙事詩です。じっくり読んで損のない古典です。内容については次号のお伝えになりますが、セネカの『人生の短さについて』を読んだことと共鳴すると思います。

旅は始まったばかりです。ぜひ新しい中学生、高校生の参加者をお待ちしています。



## 『中学英語』『中学数学』2~3年 担当 吉川弘晃

現在、中学3年生の生徒さんが1人、この英語と数学のクラスを受講しています。つまり、生徒さんにとっては今年度は高校受験の年であるのですが、どちらのクラスにおいても、基礎練習の繰り返しに徹したつもりです。そして冬学期には、難問は解けなくとも、一定レベルの問題は必ず解けるようになることを課題として重視するようにしています。以下、英語・数学のそれぞれのクラスでの取り組みを紹介したいと思います。

英語クラスではまず、例文暗唱を行います。その方法は次の通りです。① 毎回、一つの文法項目を取り上げ、10程度の短い英文を講師と生徒が音読する、② 各文の主語や時制、単語を講師が変えた上で、生徒が和文英訳を口頭で行う、③ 次の週までに全ての例文を暗唱して和文英訳を筆記で行う(森沢洋介『どンドン話すための瞬間英作文トレーニング』アルク、2006年を使用)。これによって、(1) 語彙力に加えてコロケーション(単語同士の適切な組み合わせ)のパターンを定着させる、(2) 英語でのアウトプットを筆記・口頭の両方で行う一定の習慣



を作るという 2 つの効果期待できます。中学 2 年のうちは生徒さんは単語や文法のミスを犯すことも少なくありませんでしたが、3 年の後半まで継続すると、小テストでも高得点を取るようになりました。

英語クラスでは次に、長文読解に移ります。① 単語のアクセントや意味の切れ目に注意して抑揚をつけて英文を音読する、② 一つ一つの文章を正しく訳す、③ 文章全体のニュアンスを理解する、という 3 つの点に注意して指導を行っています。分からなかった単語や熟語は、アウトプットすることを意識して覚えてもらうことで、例文暗唱での学習との相互作用がもたらされるでしょう。近年、京都の難関公立高校の英語入試問題には、英語での面接と自由英作文が含まれるようになってきました。一見すると特別な対策が必要に見えるこうした課題に対しても、以上のような訓練は有効性を持つものだと考えています。

数学クラスでは、秋学期までは多少難しめの問題に時間をかけて取り組んでもらうという方法を取りました。秋学期までは少なくとも数分の試行錯誤に耐える能力を養ってもらうため、定期試験レベルよりも難しい、例えば計算過程が複雑であったり、いくつかの手法を組み合わせなければ解けないような問題を解いてもらいます。

ここで重要なのは、一見して「解けなさそう」だと思っても「解けるかもしれない」という気分切り替え、問題の空白部分を使って様々な実験をしてみることです。図形問題であれば、自分で図を描いてみると、予め用意されたものでは気づかなかった点が出てくることは少なくないですし、確率問題であれば、いきなり  $n=1, 2, 3, \dots$  というように個々の場合の数値を出して表にすることで規則性を探すことくらいは最低限試してみましよう。

数学クラスでは、冬学期からは高校入試レベルの問題を時間を計って解いてもらうという演習方式を取っています。受験直前期に大切なのは、焦る気持ちで未知の多くの問題に触れるよりも、落ち着いた気持ちで既知の問題を復習して、最初から適切な答案を作れるようにしておくことだからです。

## 『高校英語』A・B 『英語講読』A・C

担当 浅野 直樹

近頃、NHK ラジオの「ラジオ英会話」や、その講師を務める大西泰斗さんの著書『一億人の英文法 ――すべての日本人に贈る「話すため」の英文法』(ナガセ、2011)がブームになっているようです。人気の秘密は、堅苦しい文法から脱却して、ネイティブのようにイメージで捉えようというアプローチにあります。そのアプローチには賛否両論があるでしょうが、それがどのようなものかを知っておいても損はないでしょう。

2018 年度の「ラジオ英会話」のテキストの各月の最初の説明ページにそのアプローチの概要が記載されています。

英語は語順が命であることを前提として、俗に言う 5 文型が呼び方を変えて踏襲されています。SV が自動型、SVC が説明型、SVO が他動型、SVOO が授与型、SVOC が目的語説明型です。説明型で be 動詞以外が用いられる場合は特にオーバーラッピングと呼ばれます。

語句の修飾に関しては、前から修飾するなら指定、後ろから修飾するなら説明という、指定ルールと説明ルールの 2 つのルールだけで解説されます。

その他、番組内やテキストの本文ではイメージや感情が多用されます。

中学校や高校での学習とは趣が異なるかもしれませんが、会話で瞬間的な応答をする場合や、英語で書かれた文章をたくさん読む場合には、複雑に考えているととても追いつかないので、自然と上記のようなシンプルな考え方へと帰着します。



# 『漢文入門』

担当 陳佑真

今年度の漢文入門は、受講生が初学者の方一名となりましたので、レ点や一二点といった漢文訓読の規則、頻出の助字の意味や係り結びなどの基礎的な説明から学習を始めました。

ある程度漢文訓読の規則に慣れてきた頃から、私が毎回漢文の原典のコピーをお配りしてそれを予習していただき、教室にて一緒に読んでいくという方法をとっています。

今年度はまず、中身の腐った蜜柑を市場でつかまされ怒る宰相に対して蜜柑売りが、朝廷の人たちこそ「其の外を金玉として、其の内を敗絮とす（うわべだけを立派に飾り立てて、その内面はぐちゃぐちゃだ）」と言い返して宰相は黙ってしまった、という明の劉基の諷刺作品「売柑者言」から始めました。そこから、韓愈の文学を顕彰した蘇軾の名作「潮州韓文公廟碑」、諸葛亮「出師表」などを読解し、珍しいものでは科挙の優秀答案も実際に読んでみました。

課題選択の基準としては、基本的には古典として日本や中国で古くから親しまれてきた作品、また、できるだけ背景知識がなくても読むことのできるものを中心として、時代は魏晋南北朝から清代のものまで、内容は作者の飼猫の伝記から当時の貴族社会への批判まで、幅広い漢文に触れることができるように、ということを意識しております。

漢文はただ表面の意味を追うだけでも面白い作品がたくさんありますが、作者はどんな背景でこのような主張をしたのか、このような修辞にはどんな意図が込められているのか、といったところまで意識を向けることができれば、何気なく見過ごしてしまいがちな漢字の羅列の中から生々しい感情を読み取ることができます。

漢文の読み方に絶対の正解はありません。教室では受講生の方が丹念に辞書を引いて予習してきてくださり、こう理解することはできないだろうか、当時の社会環境から考えればこの読みの方がより蓋然性が高いのではないだろうか、と積極的に議論を行うことで、私も大いに啓発される場所がありました。これからも、急がず焦らず、文章を味わって楽しみながら思索を深めてゆく学習を続けていきたいと願っております。

# 『イタリア語講読』

担当 柱本 元彦

受講生は三名から二名になりました。Nさん、お仕事の後ほぼ毎週のように七年間、ほんとうに時の経つのは信じがたいものがあります。講師もいろいろなことを教わりました。ありがとうございます。さて今期、カルロ・レーヴィの次に読みはじめたのは、ステファノ・ベンニです。ベンニは、四十年ほど前の処女作以来、本を出せばかならずベストセラーに入ります。ベストセラー作家だけれども実質のある作家と言えるでしょう。短編も多く書いているのですが長編のほうが面白いと思います。なので読んではいなかったのですが、一昨年に出版された最新作の小説『プレンドイルーナ』を選びました。昔に比べるとパワーは落ちていますが、相変わらずのベンニ節、二十年以上前に邦訳された『聖女チェルステ団の悪童』と同じような感触の、いつまでも読みつづけたい（残り少なくなるページが恨めしい）小説です。文章は難しくないとも難しいとも言えます。翻訳しがたいところが難関です。パロディとユーモアと風刺を利かせた隠語や造語や語呂合わせが散りばめられ、過去と現在、現実の世界とお伽噺の世界が交差します。想像力をフル回転させて読む必要があるでしょう。ここを乗り越えることが目標ですが、分からないところは飛ばし読みしても面白いテキストだと思います。





フランス語講読 A の授業は、2017 年の秋から哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson 1859-1941) の『物質と記憶 *Matière et mémoire*』(1896) を読んでいます。現在は最終章である第 4 章の終盤に差し掛かっており、読了が見えてきました。残すは第 4 章の残り結論、そして飛ばしておいた序文となります。遅くとも春学期最初の数回で読み終わることになるでしょう。

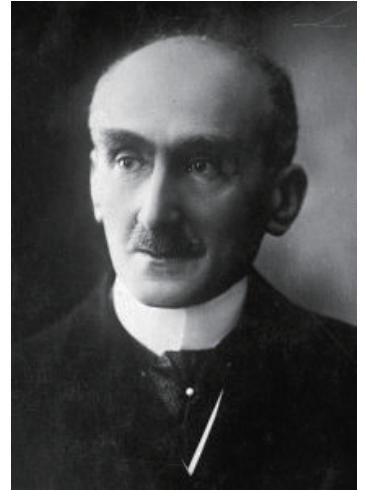
さて、『物質と記憶』の最終章である第 4 章は、精神と身体の違いとつながりについての議論で閉められることになります。精神を物質に還元する唯物論、反対に物質を精神に還元する観念論、そして精神と物質両者の存在を肯定する二元論が検討され、そのいずれもが両者の関係を十分説明することができないとされます。それは、結局のところ、精神と物質を〈空間の内に存在しているか否か〉という視点から区別しているためです。このように区別されてしまうと、空間の内に存在する物質や身体と、空間の外にあり、三次元の拡がりを持たない精神がどのようにして関係し合うのかが分からなくなってしまいます。(これは心のありようを脳の働きから説明しようとする現代の脳科学に対してもあてはまる批判でしょう。というのも、ある脳の状態が一定の感覚を引き起こすのだとしても、それはあくまでも観察される対応関係でしかなく、「なぜ」そうなっているのかが分からないからです。)

それに対しベルクソンは、精神と物質の区別は「時間」の観点からなされるべきだと言います。つまり物質は過去を記憶することがなく、ひたすら「現在」のうちに留まり続けるのに対し、精神は記憶によって過去を保持し、それをを用いることによって単なる繰り返しとは異なるなにか新しいものを世界に付け加えるのです。この意味で、物質と精神のあいだにある差異は、記憶力によって保持される過去の度合いの差異なのであり、私たちの精神ないし意識とは、記憶によって生み出されるものなのです。そして重要なのは、より多くの過去を保持することによってより多くの自由が獲得されるとみなされている点です。過去を保持することのできない物質がつねに必然的な法則にしたがうのに対し、精神は、意識的であれ無意識的であれ、過去の経験を生かして行動することによって必然性の連鎖から抜け出すことができます。ここに単なる物質的必然性に回収されない自由な行動の萌芽があるのです。

自由の問題はベルクソンがデビュー作『時間と自由』(1889) 以来問い続けてきた問題ですが、この問いは、次の著書『創造的進化』において生命の進化との兼ね合いでいっそう展開されることになるでしょう。生物の進化とは、まさに過去を蓄積することから生じるものなのです。

フランス語講読 B のクラスは、さまざまな事情が重なり現在は休講中です。再開時期はまだ未定ですが、休講前はアンドレ・ジッド (André Gide 1869-1951) の『田園交響楽 *La symphonie pastorale*』(1919) を読んでいました。再開に際しては、読んでいた箇所をつづきから始めたいと思います。

A クラスはもうすぐテキストが新しくなりますし、B クラスも再開にあわせると入りやすいかと思います。また、その他フランス語で読んでみたいテキストがある場合等もご気軽にお問い合わせいただければと思います。



## 『ロシア語講読』

担当 山下大吾

丁度一年前、2017 年度の冬学期にプーシキンの『ペールキン物語』を読み終えた本クラスは、ゴーゴリの『鼻』、トゥルゲーネフの『獵人日記』からの一編「生けるミイラ」と読み進め、この一月からはドストエフスキイの『ボボク』に取り組み始めたところです。受講生は以前と変わらず T さんお一方で、毎週マンツーマンの授業が続いております。T さんの予習に対する取り組みの姿勢もこれまでと同様あるいはそれ以上で、毎回数ページ分に渡るノートを手元に授業に臨んでおられます。

上に挙げた作品はいずれも短編あるいは短編集で、『鼻』以降は Gleb Struve 編集のロシア語読本を副教材にして、その英訳や註解も参照しながら、ロシアや旧ソ連で出版されたテキストを基に読み進めています。読本には、ロシア語を音読する際に必ず調べなければならないアクセントが逐一振られており、若干のミスが認められるものの、大半の面倒な作業から解放されるためその点非常に便利です。程よい期間に読み終わられるため、一編ごとの印象が、全体から細部に至るまでほぼ満遍なくはっきりと記憶に留まるのは、短編講読の魅力の一つと言えるでしょう。

その中でも「生けるミイラ」の主人公ルケーリヤの姿は、一際鮮やかな形で思い起こされます。明るく快活で村一番の器量よしだったものの、不慮の事故から寝たきりの状態となり、ミイラ同然の姿へと変わり果ててしまったルケーリヤ。それでも何一つその境遇に不平を漏らすことなく、全てに感謝を捧げながら日々を暮らしています。その彼女がある日夢の中で見た、光り輝く若く有翼のキリストの姿、彼に手を伴われ、以前の若く美しい容姿のまま天国へと舞い上がる様…。実話に取材したとされるこの作品は、聞こえるはずのない教会の鐘の音に包まれながら永眠する彼女の姿を、獵人たる語り手が物語る形で幕を閉じます。ここでは、作品冒頭に掲げられたチュツェフの詩行と響き合いながら、慎ましくも限りない、崇高とも言える美の結晶が描き出されています。

抒情豊かなトゥルゲーネフとはがらりと雰囲気異なる、擬声語豊かでぶつ切りの印象のドストエフスキイ独特の口調にも漸く馴染んできたところです。この先どのような世界が展開されるのか、毎週楽しみにしながら木曜の昼下がりのひと時を迎えております。



Ivan Sergeyevich Turgenev  
(1818-1883)

## 『ドイツ語初級』

担当 吉川弘晃

山の学校ではドイツ語クラスは初級と講読の2つが用意されています。前者は、初めてドイツ語に触れる方、もしくは、一通り文法を学んだが改めてやり直したい方の受講を、そして後者は、基礎文法は既に仕上がっていて本格的な講読に取り組みたい方の受講を想定しています。テキストは文法の教科書から報道記事、学術論文、旅行記まで様々ですが、いずれにおいても重視しているのは、まず紙上の一語一語を正しく捉え、次に一文一文を順々に追っていき、その上で文章全体が伝えるものを理解するという基本的な訳読です。

現時点で開講中の初級クラスでは、基礎文法復習の段階を経て、ニュース記事や学術論文を読み通した後、新しい形式のテキストとして、アルトゥール・ホリツチャーの日本旅行記に取り組んでいます。ホリツチャー (Arthur Holitscher 1869-1941) は 19 世紀末から 20 世紀前半にかけて活躍したハンガリー出身のドイツ語作家です。今やドイツ文学の世界でさえ、ほとんど忘却されてしまった文学者ですが、多くの短編小説や演劇を残しており、特に前世紀初頭のアメリカ、十月革命直後のロシア、1920 年代の中東といった世界各国を廻って書き綴った旅行記は当時のヨーロッパでよく読まれていたようです。例えば、かのフランツ・カフカが長編小説『失踪者 Der Verschollene』(未完) を書く際、舞台となる合衆国の細かい描写はホリツチャーに多くを負つ





ていたと言われています。

今回扱うテキスト「日本 Japan」は、ホリッチャーが 1920 年代中盤にインド、中国、日本を旅行し、26 年にベルリンで出版された旅行記『穏やかならぬアジア：インド・中国・日本紀行』に収められた一編です。中国を去って、日本の植民地であった朝鮮半島から対馬海峡を経て下関に到着するところから文章は始まります。宿屋の窓から見える初めての日本、ヨーロッパではジャポニスムの形で親しんでいた日本との出会いの衝撃が、大きな山海の光景から小さな部屋内の彫琢品に到るまで、具体的でかつ細かな描写を通じて伝わってきます。

古い旅行記を読む楽しさは、同時代の歴史の流れに寄り添いながら、時には親しみを、また時には驚きを、作者と一緒に追体験できる点にあると思います。例えば、東京旅行の場面では、まだ依然と残っていた関東大震災（1923）の傷跡が強調され、改めてその自然や社会に与えた損害の大きさ（火災旋風の発生地であった陸軍軍服工場の「被服廠」や、鎌倉での地形変動）を伺うことができます。また、日本で暮らしていると当たり前前に思える伝統や慣習についても、外国語の表現で読むことを通じて、新鮮な気持ちで眺めることが可能になります。

けれども、ホリッチャーの文体は、彼が自然主義文学の影響を受けていることもあってか、具体的な事物を示す名詞を羅列し、それらに形容詞や副詞をひたすらに重ねていくような、現代から見ると決して読みやすいとは言えないものです。だからこそ、名詞一つ一つの格変化や、それぞれの動詞や形容詞が取る格といった、ドイツ語読解における最初歩にその都度、立ち返ることが必要になります。

## 『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』 担当 山下大吾

去年の秋学期に 2 学期制で開講された初級文法クラスは、Cai さんと M さんのお二方と共に計画通りに課程を進行中で、ラテン語特有の文法とも言える独立奪格構文も無事消化し、間もなく教科書を一冊「あげる」段階になってきました。教科書として用いている『ラテン語初歩 改訂版』にも『ガリア戦記』などのテキストが掲載されておりますが、この調子が維持されれば他にも比較的易しいレベルの原典講読の時間が設けられそうです。ラテン語文法を一通り勉強し終えたという達成感に加え、腕試しとも言える原典との対話の時間を今から楽しみにしております。

講読クラスは、A、C クラスが散文のキケロー、B クラスが韻文のウェルギリウスという内容です。なお『義務について』を読み進めている C クラスは、残念ながら受講生のご都合がつかず、開講されない状態が続いております。

A クラスでは去年から引き続き『友情について』を読み進めています。この原稿を記している時点で 77 節まで進みましたので、全体の 4 分の 3 以上を読了したことになります。受講生 Cu さんの読みは文法的な正確さのみならず、神話や伝説に由来するエピソードが述べられた場合、各種辞典や文献などを用いて、ホメーロスなどの出典にまで遡って確認されるという幅広さで、キケローのテキストを最大限活用した高度な読書に勤しんでおられます。

B クラスでは前号の「山びこ通信」でお伝えした講読予定の作品『牧歌』の読了が間近となりました。受講生の Cac さんは、以前講読していたホラーティウスの時と同じく、韻律に注意しながらテキストを噛みしめる様に読み進められ、訳読される際には、註釈で述べられている問題を十分咀嚼した訳を与えられるという堅実な姿勢を維持されておられます。次の作品は、同じウェルギリウスの『農耕詩』を予定しております。

本来 Vergilius である彼の名前が、英語など現代語で見られる綴り Virgil へと変化している所以は、『牧歌』を始め彼の作品全体から受ける純粋で高潔な印象が、第四歌に対する、イエスの到来を予言するというアウグ

スティヌス以来の解釈も相俟って、virgo「乙女（あるいは聖母）」のイメージと結びついたためだと言われて  
います。その印象を十分感じながらも、牧歌というジャンルの先行者テオクリトスを意識し敷衍しながら、同  
時代であるローマの主題を織り込んで独自の世界を創造していく彼の姿に、音声的効果を意識しつつ、トリコー  
ロンやキアスムスなど個々の詩行に見られる精細な語の配置から、それぞれの歌と他の歌とのダイナミックな  
対応関係など、『牧歌』全体に渡る巨視的な配慮を常に失うことなく、ラテン語の持てる力を余すところなく  
発揮して作品を仕上げている彼の力量にむしろ感銘を受けながら、毎週講読を続けております。

『ギリシャ語初級』

『ラテン語初級』

『ギリシャ語中級』 A・B

『ラテン語中級』 A・B

『ギリシャ語上級』 A・B

『ラテン語上級』

担当 広川直幸

今年度も多くの授業を開講した。年度末までまだ一ヶ月以上あるが、現在の状況を具体的に記すと、ギリシャ  
語初級は教科書 (*Thrasymachus*) を学び終え、中級への橋渡しになるものとしてルキアノスの『本当の話』  
を読んでいる。ギリシャ語中級 A はヘーロドトスを読んでいる。ヘーロドトスを全部読むのは大変なので、  
抜粋 (A. L. Barbour, *Selections from Herodotus*) をテキストにしている。ギリシャ語中級 B はエウリーピデー  
スの『メーデシア』を一回に 40 行程度のペースで読んでいる。ギリシャ語上級 A はアイスキュロスの『救い  
を求める女たち』を読んでいる。山の学校で読むアイスキュロスは 4 作品目である。ギリシャ語上級 B はヘー  
シオドスの『テオゴニア』を読んでいる。

ラテン語初級は Hans H. Ørberg の *Lingua Latina I: Familia Romana* でラテン語の初歩を学んでいるが、遅々  
として進まないで *Exercitia* (練習問題集) をやめることにした。2 年以内 (次の春学期末まで) に終わら  
せる予定である。ラテン語中級 A はリーウィウスの『ローマ史』を読んでいる。ラテン語中級 B はオウィディ  
ウスの『変身物語』を読んでいる。今は作文はせずに、一回に 40 行程度のペースで講読を進めている。ラテ  
ン語上級はプラウトウスの『アンピトゥルオー』を読んでいる。

それぞれの授業のテキストや進度については、学期末から学期初めの期間にインターネット上のホーム  
ページの情報を更新しているので、そちらを参照していただきたい。

来学期に新しく開講することが決まっている授業は、今のところ「ギリシャ語初級」のみである。曜日と  
時間は今までと同じく月曜日の 18:40 から 20:00 まで、テキストもこれまで同様 *Thrasymachus* を使用する。  
一度開講すると次の新規開講は一年半から二年後になるので興味があるならこの機会を逃さないようにして  
もらいたい。そのほかの新規開講等の動きについてはまだ決定していないので、決まり次第ホームページ上  
に発表する。

さて、よい機会なので最近授業をしながら気になっていることについてアドバイスをしようと思う。まずは  
一般的な発音について。語学で学ぶべきことは「語彙と文法」の二つである。そして、それ以前に大切な  
のが「発音」である。これは古典語の場合には普通は書かれている文字を音読する能力のことを指す。当たり  
前なことだが、これができないと語彙も文法も学べない。同じ語を読んでいるのに、読むたびに母音の長  
短やアクセントを勝手に変えたり、少し長い語になると綴りを飛ばして読んだりするようでは、正しい形が  
記憶に定着することはない。発音をないがしろにして、日本語訳や文法的説明ばかりを求める人は、このこ  
とをよく考えて、きちんと音読する習慣を身につけるよう努力してもらいたい。

次は韻文の発音についてである。韻文を読んでいると、韻律単位を気にしすぎて、発音がおかしくなる人  
が多い。日本語で起きる現象では、「ぎなた読み」や、アニメ巨人の星の歌に「コンダラー」が現れると思う  
ことに、発生の原因は真逆であるが、結果はある意味で似ている。「ぎなた読み」や「コンダラー」はリズム



を理解し損なうことから来る、誤った理解＝発音の例（「弁慶が、なぎなたを」→「弁慶がな、ぎなたを」。「思い込んだら」→「重いコンダラー」両方とももとは七五調）であるが、ギリシャ語やラテン語の韻文を読む場合には、韻律単位を重視しすぎるあまり理解不能な発音をしてしまうという間違いが起きる。韻文は散文以上に音を味わうという要素が強いものであるから、韻律だけを理解するための音読ではなく、韻律を感じながら何を読んでいるのか理解できる発音ができるように指導をしようと思っている。

## 『つくる』1～2年

担当 山中 壱朗

今年度は「つくる1年」、「つくる2年（春・秋学期）」をそれぞれ開講しました。

当初は「何を作るか」というところで迷う場面もありましたが、講師－受講生間、あるいは受講生どうしで相談することで山の学校にある材料や道具を用いて手を動かしてくれるようになり、様々な作品やあそびができました。

受講生各自のペースで進めることに重きをおきつつも、状況に応じて初めての（と思われる）「もの」「こと」を試す機会を設けるようにしております。ここでは熱を用いた加工とモーターについて触れたいと思います。

●「熱」を活用した加工・・・たとえば、「切る」ではスチレンボードはスチレンカッターを用いることではさみを用いた場合よりも滑らかな断面にできますし、「貼る」ではグルーガンを用いて専用のスティックを熱で溶かすことで接着剤として機能させることができます。素材との相性もありはさみやテープほど適用範囲が広くはありませんが、積極的に手にとってもらい、作品にも取り入れてくれました。

●「モーター」・・・つい最近（つくる1年、冬学期に入ってから）のことですが、外側を作るだけにとどまらず「どのように動くのか」ということに興味を持ったことから扱いました（画像では手で隠れていますが、電池につないでいるところです）。作品の一部として取り入れるようになるのはもう少し先になるとは思いますが、歯車などを組み合わせることで回転の速度や方向を変えたり、上下運動に変換したりできます。

上記は各受講生が思い描くことを形にする過程で登場しない（ことの方が多い）かもしれませんが、一度でも触れたという経験によって、着想がより豊かになることが期待されます。

また、途中で手が止まり考え込む場面や、ふと思いついたことを試す場面も見受けられましたが、そのような場面に遭遇することで、納得のいく作品ができるように取り組む姿勢を涵養できればと思います。



作りたいものを受講生たちと相談しながら取り組んでいます。(A)「今日はこれを作りたい」と受講生たちが決めている時には、私はそのバックアップに回ります。自分で作りたいものが見つからない時もあります。そんな時は、(B)「こういうのがあるよ」と私の方から案を出します。そのうち、受講生たちの方でもイメージが固まってきて、AとBの組み合わせになるケースが多いです。

受講生たちの取り組みから私も学んでいます。当然ですが、その工夫には私の思いつきもしなかったアイデアが多く含まれます。そのことにいつも驚かされます。

作り始めると時間はあっという間に経ちます。その毎回の様子を、山の学校ウェブログに記事にしています。ぜひそちらをご覧ください。その中から一部の写真をご紹介します。



ピンボール



キーホルダー



ビー玉スライダー



ダンボール城



盾



粘土



竹とんぼ



障害物コース



わりばし船

工作は一種の自己実現です。そのような場として、受講生たちの成長に共鳴し、寄り添えるクラスでありたいと思います。



## 「スケッチブック」のすすめ

この「かいが」クラスも、担当をさせて頂いてから、気づくと10年が経とうとしています。この2018年度からは「Cクラス」が増設されました。

クラスの門を叩いて下さった皆さんへの感謝を胸に抱きつつ、クラス開設当初を思い出したり、また、自分自身の人生における絵画体験について振り返ったりしながら、どんなスタートを切ろうかと考えていました。

そんなときに思い至ったのは、今年度から、一人一冊ずつ自分のスケッチブックを持ってもらうことでした。ここからは私個人の話になってしまいますが、幼い頃からスケッチブック一冊と、鉛筆一本さえあれば、何時間でも飽きることなく絵を描いて過ごしていたという原体験があります。特に幼稚園年長のときは数ヶ月入院し、ベッドの上で長時間過ごさねばなりませんでした。この時もスケッチブックと鉛筆がいつも手元にありました。

その頃のスケッチブックは、今も手元にあります。自分でもとっておいたことを覚えていて、大人になり、「絵を生業としよう」と決意した際、何となく「お守り」のように、実家から持ってきていました。(小・中学校時代の作品など、他にもいくつか。)

4月の初回クラス、新しいスケッチブックを配った際、私が6,7歳の頃に使っていたその2冊のスケッチブックを、みんなに見てもらいました。何故そうしたかったのか思いは色々ですが、単純に「センセイもスケッチブックと鉛筆だけで、すごく楽しかったんだ!」ということが伝わればいいと思いました。みんなは笑ったり、何だろうこれ、



## ● 目に映るもの

## ～生き物や風景との出会い

外に出て、目に映る風景や、見つけた生き物を描く時間も大切にしています。切り花や、季節の野の花を教室で描く場合もあります。ひたすら虫探しをしたり、観察に没頭する人を見ていると、何だか今「しぜん」クラスをしているみたいだと思えることがよくあります。

人には決して作れない自然の万物は、いつも傍にあり、不思議さと驚き、たくさんの教えをくれます。それらはいつかきっと何かの形で人生の味方してくれるでしょう。「しぜん」でも「かいが」でも、クラスで一番大事にしたいと思っているこの考えは、私自身、絵を描くことを通じて体得した信念です。たまたま「絵画という『手段』」を通じてですが、事物とじっくり向き合い、観察して描く行為はそのために有効な手段だと考えています。

また、自然の事物との出会いから豊かな空想が広がることもしばしばです。

「かいが」クラスで、結果である作品よりもむしろこの「時間」が大切だと言いつづけているのはそのためです。

などと言いながら一通りページをめくってくれました。

それから後、5月のこと。私は実家の片付けをする機会があったのですが、自分で覚えのあるもの以外の、忘れ去られていた幼い頃の作品たちが、どっさりと箱にしまわれているのを発見しました。(絵日記や書道作品、幼稚園の帳面に至るまで、兄姉の分も全てと言っていい程ありました!) 驚きと懐かしさ、何とも言えないあたたかい気持ちに包まれ、親に「有難う」と思いました。

少し前書きが長くなりましたが、子どもたちに伝えなかったことは、「最小限あれば絵は十分に楽しめること」。その上でスケッチブックは携帯性も高く便利です。またもう一つは、特に保護者の方に、可能な範囲での作品の保管をお願いしたいということです(こっそりするならば「タイムカプセル」になります)。今の時代は画像にして保存することも一つの手ですが、やはり現物の良さを越えられません。子どもたちとの付き合いも長くなる中で、希ですがたまに「お母さんにどうせ捨てられちゃうしな」と嘆く声を聞くことができました。

絵は「その時」目に映っていたものごとや考えていたこと、気持ちの「保管庫」のような働きもし、大人になってから、小学生だったときの自分に励まされる、なんていうこともあり得ると思います。保管場所の都合で処分せざるを得ない場合も必ず作者自身との相談・納得の上でお願いしたいと思います。

そうした訳で、4月は「スケッチブックと鉛筆(または色鉛筆)」を携えて、外に描きに行くことから始めてみました。以下、内容ごとに一年を振り返ってみます。(各クラスの様子は随所、ホームページ内ウェブログにも掲載しております)

末筆ながら、10年間、温かく見守り支えて下さった先生方、保護者の方々、かいがクラス(および、しぜんクラス)に来て下さった皆さんに、この場を借りて感謝申し上げます。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

### ●心に浮かぶもの～空想を広げて

ある日のAクラスでは、園庭の上に描いた絵を互に行ったり来たりしながら、宇宙規模の壮大なお話が繰り広げられました。ある秋のBクラスでは、生徒さんたちが真っ赤なモミジと黄色いイチョウの葉を夢中で拾い集めており、その喜びが、園庭一杯に描かれた「落ち葉を手にして笑う少女」の姿となりました。Cクラスでも、好きなキャラクターから空想を広げたり、お話を考えて紙芝居にしたり、写生に空想が織り交ぜられたりと、様々です。

鉛筆一本、木の枝一本から、いくらでも楽しい時間を過ごすことができます。





## ●それぞれの表現の探求

### ・絵具による実験

描画した絵の背景を刷毛で濡らし、思い切って絵具を乗せてみました（Aクラス）。

絵具がじわっと染み込んで広がっていったり、混ざり合ったりして、絵がどんどん変わっていきます。色を乗せ過ぎたり、気に入らなかった場合は、濡れている間に動かしたり、取り除いたりすることが出来ます。こうしたプロセスが、絵に空気感や深みを与えることがあります。絵はどんどん変わっていくのだし、ある程度のやり直しもきくのですから、すぐ諦めず、また、恐れずに、足し算、引き算しながら画面に向かって欲しいと思います。

その他のクラスでも、3原色による混色や、静物画の大作、「ゴッホみたいなタッチで描いてみたい」など、生徒さんそれぞれの好奇心にもとづくチャレンジを応援しています。



### ・色鉛筆、パステルによる実験

色鉛筆では、「線を重ねる」という意識を持つことで、混色や質感表現の楽しさが広がります。中には、水彩色鉛筆に興味を持った人もいて、どのように使うことが出来るか、私も横で一緒になって試行錯誤をしました。「人の顔」を自分のテーマに決めて探求する人もいれば、実験の延長で「どの色を重ねて（この色が出来ているのでしょうか?）」というクイズも生まれました（Bクラス）。これは、自分で考えた「色のレシピ」とも言えますし、解く側にとっても、楽しい難問でした。

また、パステルは、粉状に加工してから混色したり、ステンシルのように使ったり、粉を接着剤の描線に振りかけたり、様々なアプローチを体験しました（Cクラス）。





## ・版画、はんこ

特に B クラスでは消しゴムはんこづくりが人気でした。やわらかいので、初めて使う彫刻刀の練習にもなりますし、版画への導入にもなります。また、はんこも版画も、「図と地の関係」を学ぶこともできますし、仕上がりを考えて逆算しなければならないので、結構頭を使います。

更には今回高学年がチャレンジしてくれた「多色刷り」の版画ともなると、絵を色分解して（版作り）、また組み立てる（刷り）難しさがありますが、このことは描画をする際、どのような手順で色をのせて行けばよいか、という組み立てを考える訓練にも繋がるでしょう。（写真は A ちゃんの、「スチレン版2色刷り」の例。さらに色数を増やし、次は木版へ挑戦しています。）



## ・立体紙工作

こうなると殆ど「つくる」クラスの領域ですが、枠組みはあまり気にしていません。面白いことに、みんなは「敢えて」強度の低い折り紙や画用紙を使って試行錯誤を始めました。大人が「親切心」で工作向きの厚紙を渡して「こちらの方がやりやすいよ」と言うのは簡単です。勿論、私も一度は勧めてみましたが、「折り紙」でしてみたい、というみんなの気持ちを確認できた後は、黙ってそれを応援するのみです。

どこまで出来るのか、という好奇心・チャレンジ精神がそこにあるのが、夢中で取り組んでいる表情から伺えます。丸めたり、折り曲げたり、知っている折り紙の技を取り入れたり、消しゴムが何個乗るかで強度を測ったり、有意義な試行錯誤が続きました（A クラス）。



私がお子様と保護者の皆様をお願いしたいもう一つのことは、以上にご覧頂きましたように、それぞれの興味に応じて表現の方法は無数に開かれているので、小学校で、ある特定の課題についての評価（点数）が低かったとしても、決して落胆したり、絵画や工作をすぐに嫌にならないで頂きたい、ということです。

何故なら、そうした「課題」は、予め「これを良しとしよう」といういくつかの基準で測られるものだからです。それらを「良さ」の一つとして子ども達に「示す」ことはあっても、「当て嵌めようとする」ことは間違いです。そもそも絵の「良さ」を測る基準は、取り組みの「過程」も含めてもっともっと、言葉にしきれないほど沢山あるのですから。（だからこそ、点数化しなければいけない制度上にある教育現場での葛藤もきっとあるのでしょう。）

『その子の絵にしか無い良さ』が必ずある。子どもの絵に普遍性があるとなれば、そのことだと思います。鑑賞や評価する側も（先生も、子どもたちも、大人もみんなで）、それを探そうと努力する目を養うのが、本当に必要な「子ども時代の絵画教育」だと信じて止みません。



## 〈● 巻頭文つづき〉

このようなシナリオは「言うは易く行は難し」かもしれない。現代は多忙であり、親の「読み聞かせ」の代わりにスマホが動画を見せてくれる。子どももそれを喜んで見るかに見える。だが、子どもにとって一番うれしく、ありがたいのは親の肉声による絵本の読み聞かせであり、不特定多数に発せられた情報に深い愛着を感じることはないのである。

読解力を育む観点から見ても、絵本は動画に勝るだろう。絵本の読み聞かせの場合、子どもは、耳に入る言葉を絵本の挿絵と付き合わせ、内容を理解する時間を十分に取れるのに対し、動画の場合、目で見て処理する静止画像が多過ぎて理解が追いつかない。食事で喩えれば、じっくり咀嚼するのが読み聞かせで、噛まずに呑み込むのが動画である。幼児にとってどちらが望ましいかは明らかである。

絵本の読み聞かせと音読の確認は、子どもの読解力——ひいては独学力——を育てる上で不可欠であるが、いずれも子ども任せ、他人任せで実現できるものではない。一日わずかの時間でよい。その時間を喜びの時間として子どもと共有できるかどうかは鍵となる。他方、親が忙しく、子どもの学びを塾にアウトソースし、競争に基づく学びを子どもに強いるだけでは、子どもの読む力は豊かに育つどころか、おおいに損なわれることが必至である。その結果として、また、競争にあおられた学びの結果として、昨今の中高生の深刻な活字離れ、読書力低下の問題があると私は見ている。

最後に、子どもたち（中高生）は何を読むべきかの問題にもふれておきたい。文章の精読ができる生徒にとって、古典を読む経験はなにものにも代えがたい。ただし、確かな読解力を備えた生徒には、ぜひ一步進んで「西洋の古典」を読むようアドバイスしたい（もちろん翻訳でよい）。理系文系を問わず、真理の探究を後押しする言葉が満天の星々のごとく輝いて見えるだろう。

学校教育において、なぜこの分野だけぽっかり穴が空いているのか、私は疑問に思う。明治開国当初のスローガン（「和魂洋才」）の影響によるのだろうか。だが、グローバル時代と呼ばれて久しく、また、まさに AI 時代が幕を開けようとする今、和魂か洋魂かといった区別を超越し、「人間とは何か」を掘り下げて問う視点が益々大切になってくる。例えば、人が人として自ら問いを立て、考える力をどう守り、育てればよいか。ヒントは西洋古典に横溢している。

議論を行うさいには、権威よりも理論の説得力こそ求められるべきである。じじつ、我こそは教える資格ありと公言する者の権威などは、何かを学ぼうとする人間にとってしばしば害をなす。なぜなら、学ぼうとする者は、やがてみずから判断することをやめ、自分が正しいと是認した人間の判断をすべて鵜呑みにするようになるからである。（キケロー『神々の本性について』1.5、山下太郎訳、岩波書店）

授業中に「ニュー・ヨークはどういう意味か」と問われて叱った先生は、生徒の質問が自分の権威に桶突く行為に見えたのだろう。他方、勉強を競争の手段とみなす偏差値教育は、子どもたちが納得ゆくまで問い続け、考え続ける習慣を「無駄な努力」として放棄させてきた。だが、教育者が権威をかざして「正解」を伝授し、知識の多寡を競わせる時代はいよいよ過去のものとなる（ならねば AI 時代に逆行する）。「西洋古典的視点」に立てば、真理探究の「情熱」（スタディー）こそが高等教育を受ける条件であるべきで、その情熱を欠いた者はいくら偏差値が高くてもステューデント（真理探究の情熱を燃やす者）とは呼ばれない。ところで、この情熱とは「三つ子の魂」の別名であり、幼児教育が何より大切に見守る「学びの魂」に他ならない。今後、小学校以上の教育改革によって子どもたちの「学びの情熱」が赤々と燃え続けることを祈るが、万一うまくいかなくても、良質な幼児教育と豊かな読書体験がそれを守ることだろう。

私が今心に抱いている新時代の教育観は以上の通りであり、今までと何も変わることはない。幼稚園ならびに山の学校で日々接する子どもたちには、彼らが今後末広がり活躍できるよう、これまでどおりの姿勢で応援していきたい。（山下 太郎）